窓辺

全人的医療とは

毛利（もうり） 博（ひろし）

患者さんが病名を知る権利は重要です。しかし、心の準備もできていない状況で、「あなたは癌（がん）です。余命は数年です」と告知されることでいいのでしょうか。医師は病名を患者さんに告げ、治療方針や医学的見通しを話すことができますが、患者さんの気持ちをどこまで配慮しているかはわかりません。

「全人的医療」という言葉を最近よく耳にします。「病気」ばかりに注目するのではなく、「病を抱えた人」「病を抱えて生きて生活している人」として患者さんを捉え、医療を行うことを意味します。医師は病気ばかりに目を奪われ、「木を見て、山を見ていない」のかもしれません。私が師事した聖路加国際病院の日野原重明先生は生前、患者さんの抱えている背景なども診療の際に考えるように厳しく指導されました。

全人的医療を行うためには条件があると思います。医師として必要な技量を習得していることは当然です。さらに、丁寧に話す態度があり、診察中に笑顔があり、優しい気持ちで寄り添おうとしている雰囲気のあることが大切です。また、「多職種連携」や「チーム医療」の中で、医師が看護師などから患者さんの情報を聞き、診療に生かすことが求められています。

医学教育はこれまでの知識の詰め込みから脱皮していく必要があります。医療現場では、患者さんにどこまで時間が割けるかという議論もあります。病気を治すだけでなく、医師には患者さんと向き合う心が必要なのではないでしょうか。

（県病院協会長
藤枝市病院事業管理者）